武家名目抄稿

軍陣部八十五

和書門 類
二五二〇六 號
七七 函
一〇 架
四五六 四四九 冊

内閣文庫
和書 類
二五二〇六 號
四五六 冊
一五三 函
一四 架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457 (433)
函號 153 275

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
國立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第十五冊

軍陣部八目録

責口

持口

退口

馬ノ懸場

スハリ場

伏ノ場

日本政府圖書
內閣文庫

鐵炮ノカケ所

鑓ノ合所

水巻

小屋ヲトシ

乱取

苅田

植田ヲコ子ル

毛作ヲフル

ステカマリ

芝居ヲフマヘル

惣返

大返

小返

崩色

大崩

裏崩

友崩
麁崩
繰引
相引
車返
車引
繰入
遠引

遠迯
夜ヌケ
路拂
根シメ
陣頭ヲ立直
セキヲヽハス
モリ返ス
扱ヲ入

武家名目抄稿第十五冊

軍陣部八

責口

太平記云（瓜生挙旗條）瓜生判官保、足利尾張守高経ノ手ニ属ノ金崎ノ責口ニアリ

嘉吉記云室山ノ寄セテ持豊カ威風ニヨソレ責ロヲ引退キ持豊ト戦ハントセシカ引立タルクセナレハ我先ニト引退ケ

トモ持豊ニ向テ一戦ヲ遂ヲ思フ者ハナ
カリケリ
愚耳旧聴記云南記勢州 瀬石若条 又一手ハ上ハ殿
り城ありし阿弥陀屋しきの辺へ若こうけよ御
るさまハ打税野合なりし打ほし河東ハ満ちと
立並よハからん責口へ加勢して急ぎせめよ
とて下知ありす
新撰信長記云信長卿此由御覧シテ御旗

本勢ニテ懸リ給ヘトモ歃引トレハ不叶
責口ヲ究今夜責レト宣フ処ニ森紫田進
ミ出今日ノ軍味方悉困身仕候間明日未
明ヨリ責口々々ヲ被仰付可為御最吉申
清正記云秀吉三万八千の人数ニ而平し候
中国冠の城せめ乃刻秀吉虎之助を召連
東七郎左衛門か責口を見てまいれと仰付
まれり

義残後覚云 織田源五郎殿落給条 紹巴モ西ノ坊モ忙惚果テ此殿ハ發句ヲ出シ給フカト思ヘハ藪ノ中カラ棒突出ス様ナル事ヲ云ヒ給フ者哉ト思ヒテ紹巴何被仰候ヤト申ケレハ明智殿口ニ手ヲ當ル計ニテヲワレケルトナリ果シテ後ニソ人々思ヒ合セケル理リナル哉連歌ハヨセコトニテ責口ノ手遣ヲ按シ給フニ因テトリ

持口

愚耳旧聴記云 尾崎三日内逆心之条 さる営三因内云蕃之方之の持口へ鉄炮乃葉をころしさんとて葉なと無く駈ひ急る矢倉へ自身持

松原自休手録云城兵七月十五日鳥井カ持口へ集リ近日當城ヲ可攻臨期可事急互ニ不助合持口ニメ可戦死進盃酒約之

退口

三

甲陽軍鑑末書云城攻迫合共ニカヽリ口ニハ強盛ナル者先ニスル事アリ退口ニ跡ニ殿ルハ剛強ナル者ノワサ也

東遷基業云神君岡崎の城に入給ふ故義元いまそかりし頃も還さの意あらさりしハ義元死といへとも猥に城に入るを義にあらすとて大樹寺に三日軍旅駐給ふ義元の城代も岡元心もとなき時なれハ神君に城を渡し奉り駿府へ引とりしかハ二十三日に岡崎の城に入給ふ此城の退口の事武田信玄傳聞武勇分別ともに達したる日本の若手の武士なりんと称美ありしとそ

松原自休手録云永禄十三年二月信長江越為ニ退治ニ進發ス（中略）從江州飛脚到来テ浅井カ告ニ反逆信長大キニ驚キ闇ニ當手退治ニ浅井ヲ可ニト追討ニ木下藤吉郎ヲ金カ崎ノ

押ヘニ残シ洛下ヘ被入軍兵諸大将不取敢引退家康ノ曰ク大事ノ退口也木下一人ニテハ無心元トテ残リ給フ

馬ノ懸場

太平記云

矢矧鷺坂手越河原闘條

長濱六郎左衛門只一騎河ノ上下ヲ打廻リ聽テ馳帰テ申ケルハ此河ノ様ヲ見候ニ渡ツヘキ所ハ三箇所候ヘ共向ノ岸高ク屏風ヲ立タルカ如クナルニ敵鏃ヲ汰テ支テ候サレハ此方ヨリ渡テハ中々敵ニ利ヲ被得存候只且河原面ニ御磬候テ敵ヲ被欺ハ定テ河ヲ渡テソ懸リ候ハンスランニ其時相懸リニ懸テ河中ヘ敵ヲ追テ手痛クアツル程ナラハナトカ勝事ヲ一戦ニ得テハ候ヘキト申ケレハ諸卒皆儀ニ同テ態ト敵ニ河ヲ渡サセント河原面ニ馬ノ懸場ヲ残

シ西宿ノ端ニ南北二十余町ニ磬（本ノマヽ）テ射手ヲ河中ノ洲崎ヘ出シ遠矢ヲ射サセテソ帯キケル

スハリ場

大友興廃記云（倉戦条）なをみ杉道雪ときの人数を又急におしかけ秋月の旗本残おひはらうぬかくれことしたゝひに大将はきも。すはり場をとつてきらまはりたゝかふ事（凡五段）

なかり

伏ノ場

糺井日記云（桂川合戦條）伏谷美濃日下部石見ハ伏。ノ場。ヲサリテ下ノ瀬ヨリ渡シテ鳥羽ノ燕塚邊ニ出候テ野伏ヲ集テ伏トナリ居申候

鐵炮ノカケ所

鎗ノ合所

二十 大友興廃記云（浪野十二口合戦条）豊後勢は十二口
ともに案内者にて本道脇道九折の難
所鉄炮にかけ所に合所を相談し云々

水巻

十五 甲陽軍鑑云味方うちなれ中ゆうなる一声
しにもちきゝならさるまゝ中合様口伝在之
みつまきとてものゝゆひこと是三ッ越の川
て味方うちをいとふなり

松原自休手録云日置五郎右衛門従弓手
味方ノ勢ヲ不レ知メ通ルヲ平助見テ水巻
ヲセテ通ルニ歒ヲ突ケト云ケレハ云々

小屋ヲトシ

乱取

六 甲陽軍鑑云天文十一年十月七日ニ甲府
を打立（中略）十七日ニ大門たむ下とおしてさいな
ミニ陣とり給ふかくて又七日めに逗留まて

廿五日まで海尻へ古ゐるをとめらるゝとの㕝
ありおやおとし乱ゐらゐ申しかつゝ残仕下
ヽいさつ也申限なし

九 甲陽軍鑑末書云山縣ハ家康持ノ小屋落シニ多遣シ道遙軒ノ敗軍ヲ聞一騎カケニモリヘ懸ツキ候ヘ共家康衆早引取ユヘ手ニ合ス

荊田

植田ヲコ子ル

新撰信長記云信長卿千騎計ノ勢ヲ引供シテ西美濃ヘ御出張有テ荊田ナト被仰付候処ニ大垣多藝ヨリ西旗ヲ指上ケ打出ル　○按此条

十五 甲陽軍鑑云初而多く歎は武略の事一見物に口伝一かり田は口伝一植田城古称るに口伝一他国の大川渡り不知时歎不よ

了ておしゆるなり

六
甲陽軍鑑末書云天文十七年八月八日ニ晴信公甲府ヲ御立信州河中嶋ヘ御出陣ニテ村上方ノ持分大形放火シ或ハ苅田。被仰付敵出サレハ十月十日ニ御馬入也」

家忠日記抄云天正六年八月廿二日駿州田中ヘ苅田。ノ御働牛前掾馬大谷ヒ物見に出しれ

増補家忠日記云慶長五年八月廿四日台徳院殿信州ニ著御真田安房守昌幸カ楯篭上田ノ城ヲ囲マシメ玉フ御味方ノ軍勢城近キ邊ニメ苅田。スルノ処ニ城中ヨリ軽卒シ發ノ是ヲ追ヒ拂ハント欲ス是ヲ覧スル御味方ノ軍士朝倉藤十郎宣政斎藤久右衛門殿辻太郎助小野次郎右衛門尉戸田半平鎮月市左衛門中山勘解由

左衛門等七人進テ相戦鎗ヲ合歎ヲ城門
ニ追入ル 世ニ是ヲ真田七本ヤリト云フ 太田善太夫弓
ヲ以テ鎗脇ノ歎ヲ射ル

毛作ヲフル

八 甲陽軍鑑云信玄公上野蓑輪へ出御あり西
上野の毛作を不残焼はらひ給ひけれハ
へ其名居館へ籠田路へ出て備て待請申
事よし以局とし候

十 又云上方信長攻とる敵を路々出張故の弓
矢よりたくさ故の城一ツ落城候てハ近辺の
城五ツ六ツも開けれハ東武士ハ二度三度せり
あひにおくれをとり或ハ大合戦ニ負た
りともよわけなくてせめおとくハ五年六年
もその所へ御毛作をかぶりやきし御手き仕候さま
て降参も候ハ

ステカマリ

甲陽軍鑑云 塩尻合戦条 今度板垣無穿鑿なるさ
故伊奈衆に負てより諏訪衆大勢うたれ
去ハ晴信公御身に恥入り定而法立腹（腹立）まて
信形諏訪の郡代ニ被仰付、あさ〻家も無さと
諸人法もりの外の時信玄せず可申と思振舞を
きらいしめし法批判ハ伊奈の侍衆はうたるる
陣屋に人数を残しおくをすてがまりといふ
物也能さ板垣先の敵を討てとるんとハ分リ

存つめ為るハとふ理なり

芝居ヲフマヘル
播州佐用軍記云 十二月十四日合戦條 山脇勢モ若干討レ或ハ一所ニ追倒サレ半死半生ノ者多カリケレ𪜈皆討死セント思切テケレハ城兵競懸ケレハ扱合蒐抜レハ追慕千度百度破ラレケレ𪜈遠引モセス芝居ヲ蹈テ防戦ニ城兵モ其身金鉄ナラネハ

戦ヒニ披（疲欤）テ見エタリキ

七

甲陽軍鑑云武田晴信九年以前十八歳よ
り当年廿六歳まての間に一年に二度三
度の大合戦に殿をとらせ給ふに敵方へを
しはらはみきられたる事一度もなく候更
去戸石合戦にも晴信まけれハこそ芝居を踏
まへおさまりまる敵乃押付はみ玉ひし戦
を捻ツお芝居。をふまるるを勝と申すハ昔今

今にいたるまて源氏七譜に討なきまても
勝といふハ兵の作法となり

惣返

松原自休手録云西尾ノ城ニ入ニ兵粮櫻井
小川野寺八面ヘ働其邊放火シ直ニ行ハ
三里ナレモ敵地ナレハ出ニ西野水野々州
ノ頼加勢ヲ二月八日ニ八面ヘ押寄スル
処ニ従寺内突テ出ルニ弱々ト會釈（アヒシラ）ヒ敵

ヲ引出シ惣返シニメ敵ヲ追入寺内

大返

将門純友東西軍記云國司ノ兵ハ初将門
カ軍士ヲ追テ二十余町ハセハシル間息
絶氣ツカレテ引色ニナル処ニ最前偽テ
引退クル相馬勢大返ニ取テカヘシ貝鐘
ヲナラシ國司ノ後陳ヲヲソフ

新田由良家傳記云大永元年十月廿日當

上杉殿大陣をめさき上野国那波形ア大補
先ちたねとして七百斗の人数まく新田へ出
張し御成繁分ハ當年十六歳にてく横瀬相手
代丸殿ともしけ那波家臣輕進出し新田山家
に新田荒矢田修理二無ともに家老大物見城
仕能時分にけ日大返しゝにけ合戦にて成け
るよしゆて云々

八 甲陽軍鑑云天文廿一年壬子三月 京虎地

蔵峠越ゟ時節の義京三千余備を以
て並居候ゝ京虎ハ八千の人数を引越義京
一陣を立一戦仕らまのことへとの由申たさ
きゝ義京ハかまて兼さゝ人に相しらるに及て
候とハふ手はく変へ甲氏方の侍大将に候
冨永ア小山田備中郡内ハ小山田左衛
田一徳斎芦田下野栗原左衛門佐此人ゝ
義京をくひとむる（本ノマヽ）義京地菊ハ下歴さ

始りして三千余人数を一手に作り出す。出すと
いふ相手に返し一手一戦と始

甲陽軍鑑末書云天正八年九月勝頼公甲
府ヲ御立東上野ヘ打出大胡山上セシナ
ト御順見被成城ヲハ御攻被成間敷トテ
各侍大将馬印計持セ諸勢スハクニテ御
供仕ル処ニセンノ城ヨリ足軽ヲ出シ安
中衆ト攻合ヲ初ル是ヲ見テ勝頼公方惣

大返シニ仕リセシノ城ヘトリツメ候ニヨツテ典廐勝頼公ヘ御申候ハ直ニ御攻被成ヨトナリ

小返

増補家忠日記云 慶長五年八月廿三日下 川瀬左馬助瑞龍寺ノ砦ヲ弃テ岐阜ノ城本丸ニ敗シ入テ黄門秀信上所ニ加ル大手七曲口ニシテ木造左衛門佐津田藤兵衛門其子藤三郎百々越前守等踏留リ坂中ニ於テ奮戦ヿ正則忠興嘉明等一所ニ集リ士卒ヲ指揮シテ相戦ハシム坂口ヨリ武藤砦ノ間ニ於テ敵兩度小返ノ味方ノ兵ヲ追拂フ

崩色

愚耳旧聴記云 大光寺初設合戦条 飯りなろしさも久敗み立らまほ味方崩色にみつくれと

大崩

十三
甲陽軍鑑云山縣日来よりちやひたふつゞな
る處に武勝頼公大久字が小旗が押立横ぎ
ちかひに入るて家康を切くつしなさまじ

裏崩

松原自休手録云石川伯耆本多平八郎鳥
井彦右衛門平岩七ノ介大久保七郎右衛
門等入鑓馬場カ後備裏崩メミヘケレハ
佐々信長へ云フ歟ノ旗色駿立テ見ユ今

一備被加尤ト云ヘハ被レ命ニ瀧川ニ攻ニ入勝頼
ノ本陣ニ一度ニ上ニ鯨波ヲ

續武家閑談云堀尾山城守口が備が杉原常
陸ヶ見て彼備危にありと崩る事しと云果し
て裏崩にける是を馬を近く引付ゑたまは
鉄炮馬にあたり乗るハ必ずるなる縣合ありしなれ
裏崩の相と云く

友崩

籾井日記云 冰上宗貞黒井表合戦之條 伊豆守秀香公ノ御陣モ羽柴小一郎ヲ追崩サレテ要害取テ位ノ備ニナラセ候カ是モ追討衆ノ後陣ニハナラセテ候次第ニ追詰ラレ候ホトニ國中ニハ一人モ敵ノ足ハナク所々ノ城ヲ攻タル軍勢マテ友崩レシテ北チリテ候前代未聞ノ大勝利ト云ニテ候虚崩

二十
東迁基業云 石垣原合戦条 義統の将吉弘宗像都甲は左右と中筋に備へける右に扣ける吉弘加兵衛か先んに於る士卒を引つく無き為に虚崩れきしと時枝母里か手の者数を悔て何れの家もつゝみ大道を押て追かつ吉弘小川を前にあてゝ之て徐々伏兵も起る多ちりれも一支もさ次して大将の場と云不追切崩しゝか時枝平大夫ハ人の者を引まと

以捕のきよ戦地を志さう此時大方の謠を提
なるう敵ゐ時機を同熄あらよ平去来り
属ゐ佐内其敵城突伏て首をえ云々

繰引

織田信長譜云元亀元年六月廿二日信長
乃返兵以佐々内蔵成政簗田出羽守中條
将監為殿浅井兵追之佐々簗田中條相替
防之歟在険所窺之三士力戦周旋而退之謂

繰引。

播州佐用軍記云上月城ヲ捕圍附城ヨリ夜討條殿ニハ
鵜野林四郎左衛門尉丸山八助此七人々足
軽ヲ連テ繰引ニ土橋ヘテ引ケルニ慕来
歟モ無ク夜討城兵足軽ナニトニ至ヘテ
一人モ不討

又云山服合戦條城兵頻リ追立ケル歟一捲ニ
成テ浅野カ軍勢ト混乱シテ操合間猶引

退防ヘシト繰。引。ニスル程コソアレ谷一
所ニ十リテ捲立ラレ一度モ返シ合スル
ヿナシ

十四
見聞雑録云信玄公四月廿七日被仰出廿
八日陳拂也中略隼人ハ八備ニ而此跡備一二三
四の備ひ備ニ是を繰。引。とて武田ニ侍接也」
清正記云朝鮮国「備陳さんと申こと」ね
なるおらんかい人一万ほとよせて太鼓をうち

半弓鉄射かけ一文字にかゝりけるよし甚急なり
しより注進におよふ清正備を定てまふ
乃殿ハ大事なるそれよりしんからいし
てのく為りと二百挺の鉄炮をそろへ左右
ニ出立此侍二百人鑓弓もまかせ打しらを
しつかにくり。引。にひかせたる

八
甲陽軍鑑末書云其後小笠原衆モ門ヲヒ
ラキツイテ出ントスレ氏内藤弓矢功者

ノ名人ナレハ門際ヘツメヨスル殊門前
ヲ二十枚計置弓鉄炮ヲ段々ニ立タレハ
小笠原衆出コトナラス其後内藏クリ引
ニ仕大跡ハ長蛇ノ備ヲ用テ其上摠懸ノ
摸様ヲ見テ歒出ス
松隣夜記云結城多賀谷聞ル勇将タル故
上杉敗軍ニモ備ヲ不動夜ヲ明シ白書ニ
氏康ノ前ヲ押通リ無恙引テ皈ル其比坂

東ニテ。ク。リ。引ト云コト絶テナシ是ヨリ興
リケルトナリ

相引

愚耳舊聴記云 南部勢浅利石見守家 かゝる所に新七か
家来に三浦左助と云者流るゝまて走来り
しか主のうしろより抜んてかの身者の内へ飛
入さるに太刀を被さ外記か左の肩に切付く
る外記も切る立返りて左助ふこ指ハ流し

合近江ゟ一ノ川海の間拾四五町ありあひさて
八幡よりすゝみて切合しか双方共に手負
ひ相。引。にこ持よりけれ
又云大光寺初度合戦之条 但馬と伊勢守との志て
も数き内に二度近乃せり合にて各々ぬら也
たりけれ共相。引。にこ持ありけれ

増補筒井家記云筒井方猶原右衛門尉片
岡彌太郎吉村小兵衛小田切宮内小和泉

四郎左衛門等二千五百余人ハ信貴山法
隆寺ノ敵ヲ押ヘテ在シカ辰ノ市ノ敗兵
ヲ打留ント路ヲ塞ク入江左衛門父子岡
周防守海老名両人森兵助等踏留リ戦ヒ
松永方三百余人討レ筒井方百余人討レ
相。引。ニス

車返
梅松論云今日十三日足柄箱根乃両大

大将一手に成て府中より車返し浮島原
まて到りまて陣を張といふことなし

車引
別所長治記云天正六年三月廿九日三木ノ城ニ押寄ス中略秀吉先谷々ヲ放火シテ足軽軍少々始ラレ敵ノ競ヲ見給卒尓ノ軍難成トテ人數ヲ上ケ引取給フ日既ニ及夕陽シカハ後ハ羽柴小一郎秀長ニ申付秀吉ハ再拝（采配カ）押取信長流ノ車引ニ人數ヲ左右ニ引取

矢嶋十二段記云天正十年五月中旬矢嶋殿より孝子吉殿を攻仁賀保殿後詰に成ル爰矢嶋殿勢車引と申古引にて成ル

大友興廃記云龍造寺隆信信隆条々隆信和談されあ
りといふとも由ゑんはらまるまじきよし
重ねて和談を頼し免許なく先陣より川わかれ

も此御意哉うちたまハり御尤なりと諸
軍は存外もかくのことくなりと回しける
皆軍卒ハ奇見して車。引。といふ物ハ
引と見ゑ言山まひゐへたん哉とる

奥羽永慶軍記云（仁加保矢嶋確執條）矢嶋勢ヲ催シ
瀧澤カ館ヘト押寄ル斯ル処ニ遠斥候ノ
後人遠ク走リ来テ只今鎌ケ淵ノ方ヨリ
人數五六百人押来リ候後勢ノ多サハ不

見候是ヤサシク仁加保殿ノ後攻ノ勢ト
コソ存候ト云矢嶋是ヲ聞テ扨ハ我人數
アタルヘカラストテ車。引。ニスル

繰入

籾井日記云（桂川合戦條）敵ノ大将トモハ信長
名代ノ三七ヲ始メトシテ志賀ノ城ヘト
志シ粟田口邊ヘ向ハレ候ヘト教訓致ス
ユヘ山城同心致サレ候其ヨリ諸陣ヲト

ミノヘヨク下知シテ心シツカニ引取ル
諸陣ヲソリヘヘノ法トシテ段々ニ引入
レ粟田口邊ヘイツレモ同道ニテマイリ
申サレ候

遠引

新田老談記云随見勝安合戦ニ討勝テ御
悦不斜作去未タ歟モ遠引モセス大方ハ
用明ニ集リ夜ハ明ルヲ待テ明日早天ヨ
リ押寄セ今日ノ耻辱ヲスヽカント可思
云々

遠迯

籾井日記云（籾井矢織 明智退條）明智滝川ラハカミ
メヲカノメキ候言ハノ下ヨリ跡形モセス
ホトニ遠北シテハ候云々

夜ヌケ

大内義隆記云大将陣ニハ尾頭ヲ取魚鱗

陣ヲ東ニアテ鶴翼ノ陣ヲ西ニシテ南方ヲアケルヲ養父道麒入道後詰ノ為ニ山内大和守豊道同直道同鷹野山(毛欤)利元就ニカタラハレ諸勢ヲ引卒シテ同九月十六日ニ對陣スレハ雲州ノ軍兵モ退屈シ和與ノ調法アリケレハヤカテ同心仕リ夜。ヌ。ケニソ引ニケル

路拂

籾[五]井日記云(摂州青野合戦条)又村上彦三郎生年十八歳剛兵ニテ候荒木修理ヲ組伏セ候ノニ兄ノ荒木新介カ来リテ組付ケルヲ又取テヲサヘテ組シキテ候(中略)只今ノ御ハタラキ神妙ニミナニシテ候名アル御方トハフレテ候卒尓ニハ御印シヲハ申ウクマシキソ弓矢ノ礼義ハコレマテニ候御名ノリ候ヘ路。拂。ヒイタシヲクリ届クヘ

ク候トテ大勢ヨリカミルヲ制シテ候

根シメ

籾井日記云 信忠公羽柴押 寄西口之條 味方ノ間者衆
ハ思ノ下ミニ評議ヘテヲ聞付テ追々ニ
注進ハシキナミニテ候歟ノ分別ハ以前
ニモコリテ候ヘハウカト乱入スヘカラ
ス次第ニクリヨセ候テ根。シ。メ。大夫ニシ
テ城々ヲ押ヘテハミ入申スヘキ旨ナリ

陳頭ヲ立直

籾井日記云 氷上宗貞黒井 表合戦之條 谷小野木并ニ
播州ノ降人トモハ静カニ陣ヲヨセテ赤
井小林カ陣ヲ目ニカケテ横合ニ掛ルヲ
小林赤井ハ但馬勢ヲハ須知ニ譲ルトテ
追捨。陣。頭。ヲ。立。直。シテ揉合テ候ニ赤松殿
ノ陣ハルカニ見テ播州不義者櫛橋小寺
長井神吉等カ旗ノ見ユルハ一々ニ討テ

捨ヨトテ林隠レヨリ静々トヨリテ天罰
シラス嗚呼者ニ誠トノ赤松家ノ手並ヲ
教フソトテ無二ニ掛入テ火焔ヲハキテ
戦ハレ候ハ無慙ニ乱レテ候
セキヲヤハス

十六 大友興廃記云義遊山のときやすくゑ川橋
ゆ渡るてまてこさをとうり川の城れも人をとる
み山川の猟よあ似多り岩をつハ猿を脉りり

多りときせき城溝りし康恒みた同
モリ返ス

高國記云高畠甚九郎先度ノ辞ヲチカヘ
シト乗入名乗カケ一先ハモリ返シタレ
トモ引立タル勢ナレハツヽイテ返シ合
スル者ナクテ高畠終ニ適レニケリ

十七 大友興廃記 伊東三位入道 義久与合戦条 三位度信米良
伊豫守と兵庫頭と諸城合一る兵庫頭の頬

当時ハちつき残実伏てまてに首をとらん
とする所ニあたに薩州勢もやかへし兵
庫頭も舟まて戦ありてする

扱ヲ入

義光物語ニ義光公聞召れ若者共振舞ヲ
なす討とられんと思召しかれ共いかゝ成べき策も無
有なるは勝負若者なるは味方になして
一方ハ大将ともあるへしやと思召今延助並
殊ニ厳ニ扱を入れ和談あるといへとも緑ニ無
承引云々

武家名目抄稿第十五冊

明治十五年十二月　旧稿校正　小野由久

同年月三日再校并書　盛山宗阜

同年十二月十九日暁以旧校一校加朱點之

了杰

明治十七年二月十二日　校合　青島英保

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan